

「学び」で繋ぐ秩父—東京間荒川流域の連携プログラムの検討 自然・文化・歴史に光を当てる上下流域交流の可能性 —秩父市大滝地区現地調査から—

大正大学地域創生学部 出川真也研究室（社会教育課程担当研究室）
出川真也 角田祐基 高橋咲紀 大金聖人 荒田仁志

1. 調査研究活動の趣旨と目的

秩父市大滝地区における地域資源利用調査・活動に東京農業大学農山村支援センターメンバーとともに外部参加者として協力することを通じて、上流域（秩父）と下流域（都心）の連携・活性化に寄与する交流プログラムの検討を行った。地域活性化の軸として①地場産業育成、②食文化、③自然体験活動、④山やダムなど歴史的資源の活用といった4つの観点に着目して上下流域連携、地域活性の可能性を考察した。



写真1 現地の宿において地区の地図を広げて検討を行う（農大(左)および大正大(右)の混成メンバー）。

2. 秩父市大滝地区の概要

(1) 主な産業について

1) 林業の歴史

大滝地区は面積の9割が山林であり林業を主な産業としてきた。材木の供給地として、荒川を利用して江戸まで運ばれていた。その際、鉄砲関という方法を用いて搬入を行っている。これは林道や自動車などのインフラが整っていない時代に使われた手段であり、現在では文化的価値があるとして資料館に展示されている。

江戸時代には幕府直轄領として御山林となり、伐採等は規制されていたが、住民のための稼ぎ山として1里半（約6キロ）まで入山し8種類の材木加工品を生産し、搬出・販売することが許可されていた。

2) 鉱業の歴史

江戸時代に鉱山開発が行われ、金・銀・銅・鉄など産出された。平賀源内が鉱山開発を行っていた記録があり、現在も住居が残されている（非公開）。



写真2 秩父市大滝地区の深い

2) 農業の状況

農業では中津川芋・大滝インゲン、大豆加工品としておなめなどの特産品がある。しかし、土地が急峻であり、耕作は逆さ掘りという方法で行うため平地に比べ概して困難な営農環境にあると言える。

3) 観光の状況

大滝地域全体が秩父多摩甲斐国立公園に指定されている。自然環境に恵まれた土地であり、溪流釣りやキャンプ、ハイキングを楽しむことができる。また、三峰神社では御守りが人気であり、行列ができるほどの盛況振りである。一方で、宿泊業は不振で、民宿が激減している。



写真3 今回お世話になった民宿。今では集落で唯一となっている。

(2) 地区の現状と課題

主たる産業であった林業は価格競争の影響もあり衰退し、現在はほぼ行われておらず山が荒れる原因にもなっている。上下流域交流事業においては、簡易製材機を使って、山林の活用や余っている木材を使った木製三輪車作りなどを行うなど、山林振興活動に取り組まれている。

観光面では、雁坂トンネルの開通以降、通過交通が増加し滞留者が減少している。そのため、以前は民宿等も多く営まれていたが利用者の減少や経営者の高齢化による廃業が多くなっている。

鉦山開発やダム建設による就業者の増加時期以降、人口は右肩下がりに減少し、平成 28 年 8 月には約 800 人となっている。また、大滝地区にあった小学校、中学校はともに閉校となっており、子ども達が外に出て行ってしまう傾向がある。農協か役場以外には働く場が少ない現状であり、新たな雇用の場の創出が求められている。

3. 調査活動の内容

(1) 調査研究活動の全体日程

- 6月 平成 28 年度荒川ビジョン推進協議会出席
- 7月 事前調査・資料収集 現地調査のための諸調整
- 8月 大滝地区現地調査
- 9～10月 現地調査結果の取りまとめ
- 10月 豊島区生涯学習施設「みらい館大明」での研究報告と都市部住民の意見収集
- 11月 大正大学学園祭「鴨台祭」での研究報告と都市住民・学生の意見収集
- 12月 報告書作成

(2) 現地調査の内容

1) 現地調査の日程別概要

8月に行った秩父市大滝地区における現地調査活動では以下の取組みを実施した。

- 1日目：8月23日 現地入り。秩父市大滝支所にて地区概要についての説明を受ける。
- 2日目：8月24日 山村資源保全への利用を目的とした未利用トンネル整備。
- 3日目：8月25日 トンネル整備作業及び周辺山林におけるマメガキの賦存量調査。
- 4日目：8月26日 集落において郷土食・伝統野菜に関する取材とヒアリング。

2) 現地調査の日程別詳細

1日目（8月23日）現地入りと地域特徴の把握

台風の影響がひどく野外での活動ができなかったこともあり、秩父市大滝支所にて、大滝地区に関する概要説明（行政、NPO、民宿小河さん）を受けた。

役場職員は少数ではあるが、それぞれ大滝地区のことを熟知しており、台風被害の規模の推測や迅速な対応を行っていることが印象に残った。大滝地区周辺にある河川の様子を見ると、本来であれば透き通るほどにきれいな水が流れているものが台風の影響で泥のように濁っている状況だった。

今回の中心作業となるトンネルの整備は悪天候のため翌日に持ち越しとなった。



写真4 秩父市大滝支所にて地域概要についての説明を受ける。

2日目（8月24日）地域調査（自然・文化・食）とトンネル整備

天候が好転したこの日は東京農業大学農山村支援センターのメンバーを中心に、大滝地区を流れる大血川河畔に位置するトンネル整備作業を実施した。もともと大血川周辺は石灰採掘場として利用されていたことがあり、今でも名残としてトンネルがいくつか残っている。トンネル内部の気温や湿度は一定に保たれており、その特徴を生かして農産物や林産物の保存活用の可能性を検討することがこの取り組み



写真5 NPOの吉田さんから現地の概要説明

の目的である。作業内容として①土嚢作り、②足場作り、③棚の作成の3つを行った。

・地元産品保存を企図したトンネル整備作業

土嚢作りは、トンネル内の水の量を調整するのに必要なものである。現在トンネル奥に掘削機が刺さっており、その隙間を通して水が流れトンネル内部は水が溜まり、トンネルの入り口から溢れている状態となっている。そこで周辺の山土を用いて土嚢を作り、トンネルの入り口及び奥に水量調整のための土嚢を敷き詰めることとした。山の土は都心の花壇や公園の土と比べると、程よく水分を含んでいて柔らかく、粘土質のものであり、水を止めるための土嚢作りに適しているものであった。



写真6 周辺の山土を利用しトンネルで使用する土嚢を作る

この作業と並行してトンネル内の足場作りを行った。トンネル内は冠水している状況であり、水面上に足場を構築するためプレートを敷き詰める作業を行った。

土嚢による水量調整とトンネル内部の足場作り後には、農産物や林産品、加工品を保存するための棚の作成を行った。鉄パイプを組み上げた工事現場で利用されているような構造で、非常に頑丈なものである。このため実際の土木作業現場で用いる道具なども必要であり、やや難易度の高い作業となった。



写真7 トンネル作業のメンバー



写真8 冠水するトンネル内での足場づくり



写真9 保存産品を陳列する棚の設置作業

・溪流魚の利用について

昼食は地元の食材を使った定食をいただいた。大血川上流部にある管理釣り場の食堂で食べたイワナは絶品であり、釣りなどのレジャーと合わせて溪流魚資源の活用可能性が検討できると考えられるものである。

写真9 溪流魚の塩焼き参考写真
(左ヤマメ、右上ニジマス、右下イワナ)



・ダム見学

トンネル整備作業後に周辺のダムを見学した。雨があがったため水は落ち着いていたのが、まだ水は濁っていて、ダム壁の近くには大量の流木が流れ着いている状態となっていた。こうしたダムにたまる流木は炭作りに再利用されているが、近年は炭焼きの担い手となる人材不足のため、技術継承が十分にされておらず、こうした流木処分に苦勞しているとのこと聞いた。



写真10 流木に覆われたダム湖

3日目（8月25日）山林におけるマメガキ等の賦存量調査

トンネル作業を続けるとともに、栃の実を収集するための網の拡張、マメガキの調査（本数、木の状態、実用化）を行った。

・トンネルの付随整備作業

トンネル整備では内部の整備はほとんど終わり、トンネルそのものの実用性を上げるために、上の滝から水を引っ張る作業や落石・土砂対策の防護網の取り付けを行った。

写真11 落石・土砂防止のネット張り作業





写真 12 トンネル入り口に引きこんだ水を利用
使用した加工設備の設置

写真 13 トチノミ調査のための収集ネット設置

・ マメガキ調査

マメガキ調査では山に入り、賦存量調査を行ない、実のなっている木とそうでない木の区分けを行った。いくつかマメガキを枝物として採取して、生け花として使えるように、葉をとるなどの軽加工を施すなどの試行を行った。

東京農業大学農山村支援センターではこれら林産品と地域農産物や加工品等をトンネル内の棚に保存し、今後どのような変化が生じるか調査研究するとのことである。



写真 14～17(左上・右上・左下・右下) マメガキ賦存量調査 (実のなる木となっていない木の分類)、マメガキの枝採取、枝物の加工 (葉を取る)、出荷状態のマメガ木の枝物

4 日目（8 月 26 日）地区内集落における郷土料理と伝承野菜取材

地区内の集落に赴き、食文化や集落に関する聞き取り調査を実施した。山肌に沿って形成された集落は景観的にも印象的であった。地元産の特徴的な小ぶりのイモを田楽にした料理をいただいた。甘みが強くおつまみやお茶の時間のおやつとしても適しているものである。



写真 18 山の急斜面に立地する集落景観



写真 19 集落で取れる芋を使った田楽



写真 20 芋の大きさは小ぶり

集落の畑は斜面を利用したものとなっているため、平地とは異なる苦勞がある。しかし集落に住んでいる方々は高齢の方が多く、住んでいた子どもたちも高校生ぐらいからは村を離れてしまい、そのまま地元以外で生活する傾向がある。また農業以外にも民宿を経営していた時期もあったが、年々利用者が減ってしまい今では1軒しか残っていないとのこと。インタビューの中では、若者の力がほしいという要望を強く感じるものがあった。



写真 21 急斜面に立地する畑



写真 22 小石が混じる特徴的な畑土

4. 調査結果考察と上下流域交流プログラムの提案

今回の調査・実践活動を通じて、秩父の上流域と都市部の下流域をつなげるプログラムを検討するにあたって、4つの観点(①地場産業育成、②食文化、③自然体験学習、④歴史)から考察した。以下に考察結果を詳述する。

(1) 地場産業づくりー上下流域交流と「未利用資源」「再利用資源」「利用資源」可能性

大滝地区にあるもの(地域資源)をどう生かすかが今後の地域づくりのカギとなると考えられる。地域資源を使って産業を作り、雇用を生み出すことができれば若者の流出を防ぐことにもつながるのではないだろうか。

地域資源としては、かつて使っていたが、現在は十分に使われてない「再利用資源」や、これまで使ったことがなかった「未利用資源」をどう生かしていくかがポイントになる。前者はかつての経験や知見があるが、新たな要素を付け加えて価値づける必要があり、後者はこれまでの実施経験・知見がない新たなチャレンジといえるだろう。また現在使われている資源(「利用資源」)の高度利用も検討の余地があると考えられる。

1) 「再利用資源」活用による既存産品と連動した地域産業開拓の可能性

今回の調査においては、具体的な再利用資源としてトンネルの活用が注目される。もともと大滝地区は鉱山として栄えた村であり、その作業跡として現在使われていないトンネルがある。トンネル内部の室内温度は13℃前後で外の天気や気温の影響を受けないため貯蔵庫として好適であると考えられる。このトンネルを整備し、貯蔵庫として活用することで、保存品を熟成させて付加価値をつけることが期待される。熟成させる物としては地域で作られているジャガイモや焼酎などが考えられる。トンネルに一定期間保存し、熟成等による価値づけを行った商品として販売することができれば、農業だけでなくトンネルの貯蔵庫業としての雇用を作っていくことができるのではないかと考えられる。また、付加価値商品を下流の都市地域に販売するなど流通面でもさらなる雇用の増加につながる可能性があるのではないかと考えられる。

2) 「未利用資源」の活用 - マメガキを通じた山の手入れ作業と防災交流の可能性 -

未利用資源としては、マメガキが挙げられる。これを生け花や柿渋として販売することで、地域にお金と人を生み出すことができるのではないかと考えられる。生け花として販売する場合すぐに出荷しなくてもトンネル保存によって時期を調整することで、需要に応じた販売を行うことができる。また、マメガキは地区内に数多く生育しており、これを山仕事の一環として整備していくことは、マメガキの商品としての産業化だけでなく、山の手入れを促すことにつながり、結果として山林の防災上の効果が見込めるのではないかと考えられる。これは下流域にとっても防災政策上メリットがあるものといえる。

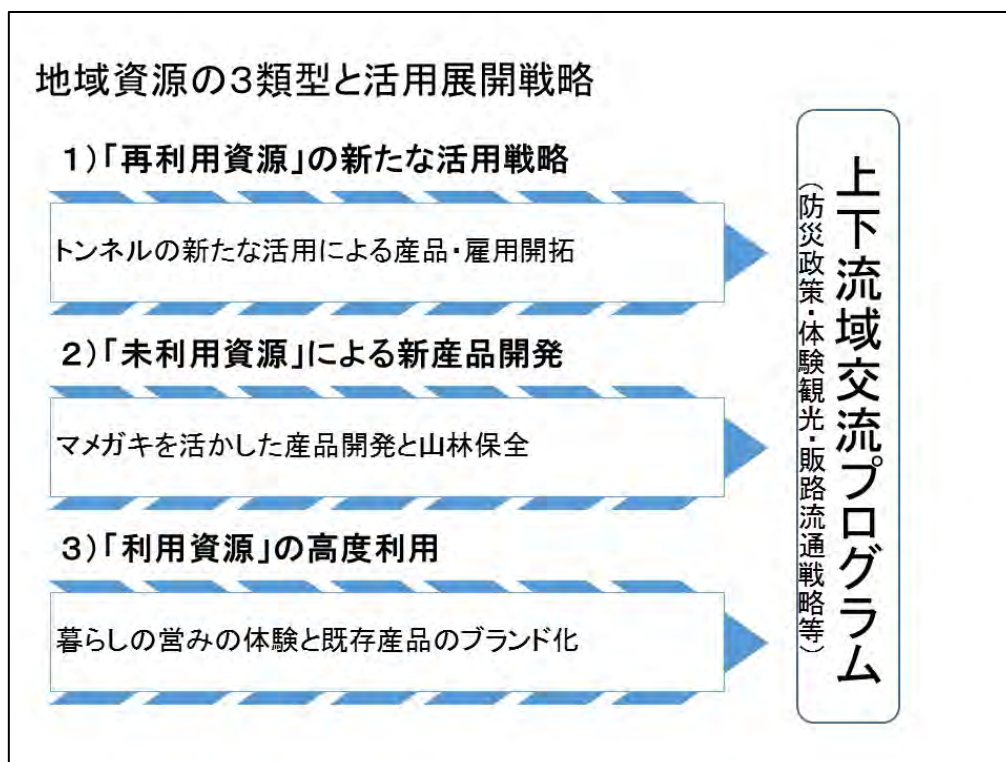
こうしたストーリーから考えると、上下流域の連携のシンボルとして、マメガキを軸とした山の手入れ作業やマメガキの販路として都市が協力することが考えられるのではないだろうか。いわばマメガキを通じた防災交流プログラムである。

3) 「利用資源」の高度利用について—体験を通じた利用の可能性—

現在利用されている資源の高度利用策としては、大滝地区における農業や林業体験が考えられる。農業においては、急峻な土地環境のため平地とは違った苦労や工夫ある。そのギャップを逆手に取った山村ならではの農業体験（逆さ掘り体験ツアー）が考えられる。

こうした体験を、現在実施されている都市住民が来訪して行っている簡易製材機を使った林業体験と組み合わせることで、上記「未利用資源」「再利用資源」の活用と合わせて総合的に地域資源を活用し、発信力を高めていくことができるのではないかと考えられる。

にぎわいをつくり出すという点で「体験」活動は有効であると考えられる。ただ体験をしてもらうのではなく、地域の日常的な作業を体験プログラムとして設定したり、耕作放棄地となっている場所を利用してもらうなど地域ニーズに合わせた工夫をすることで、地域の人手不足に対する対応や土地の有効活用にもなるのではないかと考えられる。



以上のように、大滝地区の資源を「未利用資源」「再利用資源」「利用資源」の3類型からそれぞれ上下流域交流の視点からその特徴に合わせて戦略的に利用していく方策を考えられるのではないかと。次節からは、食文化、自然体験、歴史といった3つの軸から具体的なプログラムについて検討する。

(2) 食による上下流域交流の可能性—「料理」「定期市」の利活用可能性—

1) 下流域では調達できない食材の特徴

① 溪流魚 イワナ・ヤマメ

秩父において着目されるものとして独特な「食文化」があげられる。大滝地区には埼玉県

および東京都を流れ東京湾に注ぐ荒川の源流があり、イワナやヤマメが生息している。シーズンになると溪流釣りを楽しみに多くの観光客が訪れる。釣った魚は塩焼きにして食べるとおいしいことで有名である。

②農産物 伝統野菜：中津川芋・大滝インゲン

大滝地区の代表的な農産物ともして、中津川芋・大滝インゲンがある。中津川芋は、私たちがよく見るジャガイモと比較するとかなり小さい芋である。大きいもので5cm、小さいものは3cmほどである。大滝地区ではこの芋を油いためや田楽にする文化がある。中津川芋は、日露戦争の時に極東ロシアに抑留されていた秩父市大滝出身の兵士が持ち帰ったといわれている。肥料を与えずに作るため、標高の低いところで作ると大粒になり、皮の赤色が淡くなってしまふといわれている¹。下流域部の都市では、標高が低いため大きな芋しか育たず、色も変化してしまふため、希少性の点でも中津川芋は魅力的だと言えるだろう。

大滝インゲンは、味の感じ方に個人差はあると思うが、非常に甘く、苦みが少ない。これほどの甘さを持ったインゲンは下流域では珍しいのではないかと考えられる。

③加工品 おなめ

「おなめ」は秩父味噌とも呼ばれ、重厚な味で味噌の香りが強く、旨みが強いのが特徴であり、秩父市の名産としても知られている。

2) 農業の衰退（高齢化・後継者不足）と厳しい自然環境

大滝地区の食文化について簡単に触れたが、その基盤となる農業は実際にはそれほど盛んに行われていない現状がある。その理由は、現在農業を営んでいる住民の高齢化が進んでおり、後継者もいないということが挙げられる。また、大滝地区は辺り一面が山で囲まれており、農業に適した土地が非常に少ないという地形的特徴を持っている。そのため、山を拓いた急斜面で農産物を生産している。秩父市全体でみても畑などで使われている土地はわずか5%しかないのが現状である。しかし、この量的には少ない農産物も活用の仕方を工夫することで、下流域である東京都との交流を図ることは不可能ではないと考えられる。

3) 大滝地区の「料理」を下流域に売り込むという戦略

①「料理」によるPRと活用

農産物そのものではなく「料理」とすることで、付加価値を付けた食文化の発信可能性を探ってみたい。

大滝地区の名産である中津川芋・大滝インゲン・おなめやそれを使用した料理で交流を図ることができると考えられる。この名産を使用した代表的な料理の一つとして中津川芋の味噌炒めがある。調理法は、湯がいた芋を油でいため、味噌と砂糖でからめる。その後お好みで黒砂糖による味付けをするといったものである。他にも魅力的な料理は多々ある。

料理を下流域に売り込むことで、都市部のレストランや学校の食堂、さらにはスーパーマーケットなど様々な場所で交流が生まれる。こうした下流域のレストランや食堂、スーパーマーケットなどで利用されることで経済的効果を生み、上・下流域の双方に利益がもたらさ

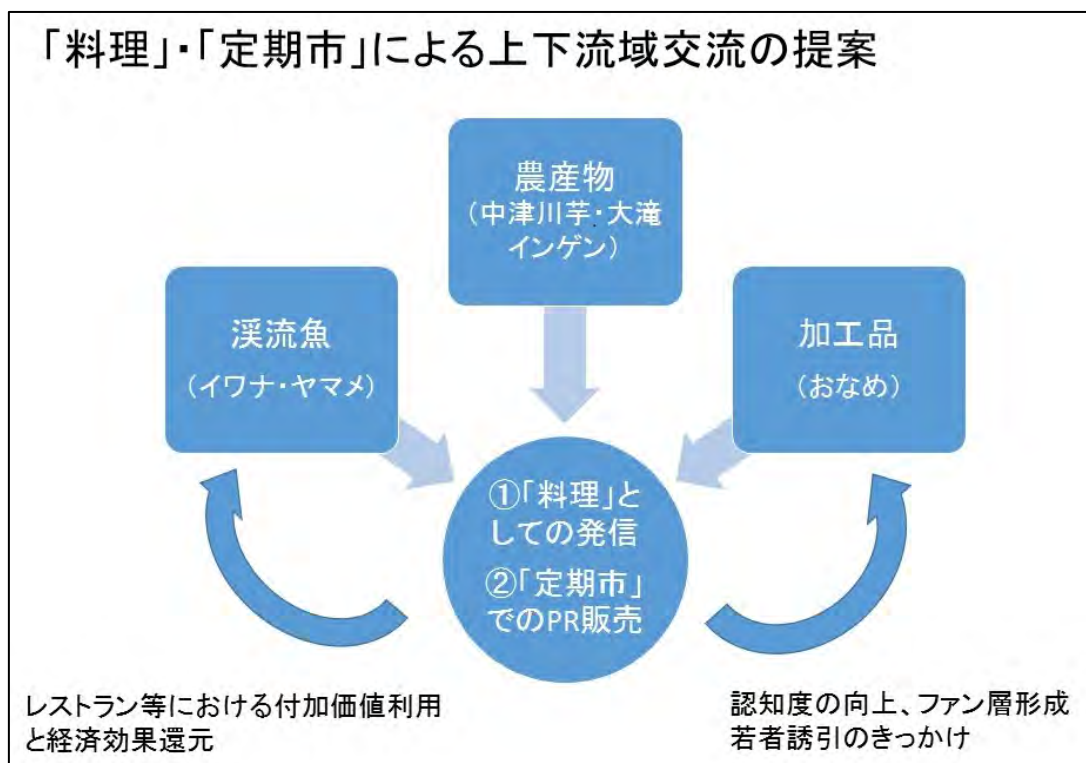
¹ <https://www.pref.saitama.lg.jp/b0904/jibayasai.html> 2014年3月17日掲載

れるのではないかと考えられる。

②定期市を利用した販売促進

大正大学では、定期的に「朝市」という地方地域の産物を販売するイベントを行っている。こうした都市部の地域商店街に根ざした定期市で秩父市の農産物を売り込むというのも1つの方法ではないかと考える。大滝地区の名産は、下流域の人々にほとんど知られていない現状では定期的な機会を利用したPRは効果が高いと考えられる。

また後継者不足に悩む現状において、下流の都市地域の若者たちとの接点を増やすことは、少しでも後継者となりうる関心のある若者とつながりをつくる上でも有益ではないかと考えられる。



秩父市大滝地区の今まで知られていなかった素晴らしい食文化を基軸にした交流活性化策として、「料理」化によるPRと定期的な市の利用した販売を提案したい。

(3) 自然体験 -ありのままの自然に触れて子どもたちの自然の再認識を図る-

1) キャンプ場、林間学校ハイキング、溪流

現在の大滝地区には、民間企業によるキャンプ場がいくつか点在している。夏季のみの営業だが、子どもたちが自然に触れ合える機会の1つとして挙げられる。また林間学校として大滝地区周辺からハイキングをすることといったことが夏季限定ではあるが行われている。

地区内を流れる荒川及びその支流での自然体験については、昔は遊び場として子どもたちが集まっていたが、現在では釣り場としての利用以外はあまりされていないようである。このように子どもの自然体験活動として夏の期間以外には継続的な実施があまりなされて

いない様子も垣間見られる。

一方で、山の地形を利用したバイシクルモトクロス(以後 BMX)やランニングバイクというスポーツが盛んに行われており、幼児から小学生の子どもたちが参加している。広大な自然を有しているという地域の特徴を活かして、従来の発想にとらわれずに、新たなスポーツやアクティビティを含めて、地域の自然利用の可能性を探っていく必要があると考えられる。

2) 険しい自然環境をいかに生かすかー都市住民とのギャップについてー

大滝地区は周りを山々に囲まれ河川が複数流れる自然豊かな場所であり、その自然環境にそった生活や作物などが存在している。このため自然体験をする場所として十分な価値があると考えられるが、一方で都市部と山村における自然観の違いといったギャップ、とりわけ都市住民(子どもたち)が山や河川を利用する際にどのように安全面で配慮するかが課題になるのではないかと考えられる。

本節の執筆担当者(荒田)は都会生まれ都会育ちである。自然が奥深い大滝地区を訪れてみて懸念されることは、単純に自然を重きとした体験プログラムを組んでしまうことにより、都市住民が抱いている自然の規模や体験の度合いの許容量を超えてしまい、かえって敬遠されてしまう可能性があるのではないかということである。

山も川もなく、ビル群の中で生まれ育った人にとっては等間隔に植えられた街路樹や公園にある幾つかの木のことを「自然」であり、自然体験は水族館や動物園といった管理され区切られた安全な場所で「観る」という動作だという程度にしか考えられていないかもしれない。少なくとも筆者はそうであった。一方で大滝地区では、自然は住んでいる環境そのものであり、自然と共生する日常そのものが自然体験と言えよう。

このように都市住民と山村住民では、生活圏や価値観が大きく異なっているため、地域の生の自然や暮らしをそのまま子ども向けの自然体験プログラムを設定しても、あまりの違いから危険と判断される可能性もあるのではないか。大滝地区のような場所に都市の子どもたちを迎えるなら、①自然に対する脅威、②その中で活動するための知識や方法、③自然に対する理解をしてもらう、など都市からの参加者側の目的や知識・スキルに応じた事前の準備学習のようなプログラム設定が不可欠であると考えられる。

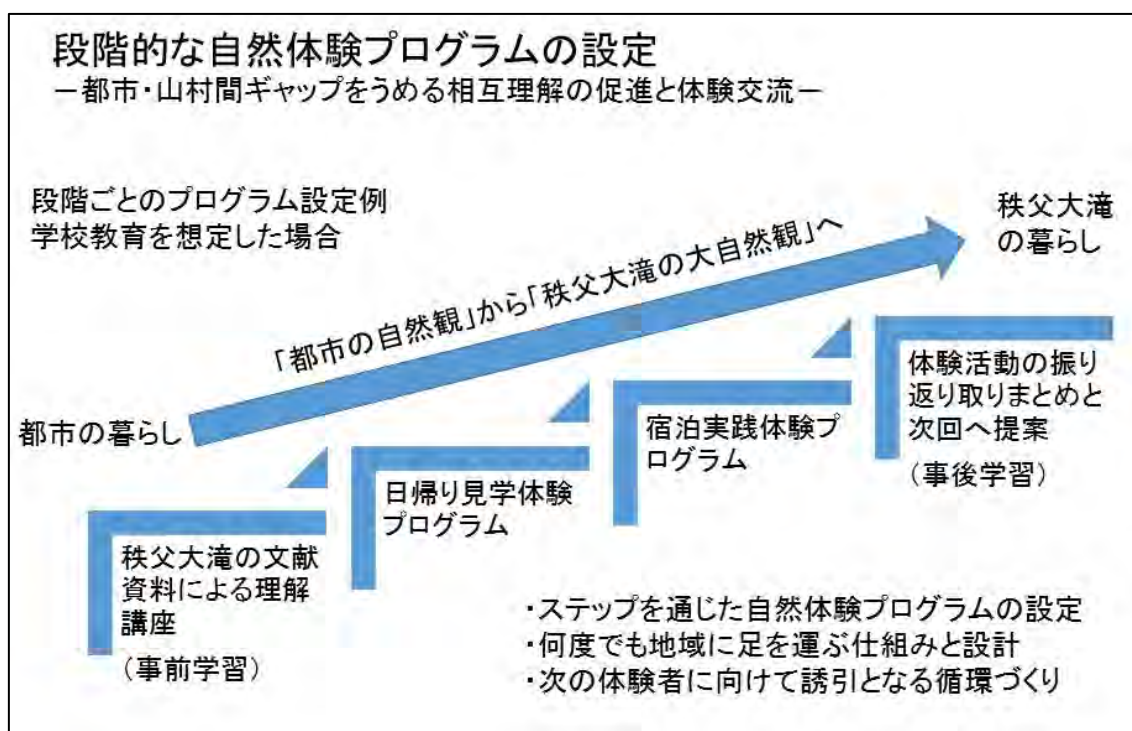
3) 相互理解と段階的な体験プログラムの設計

大滝地区の自然を利用した体験活動事業を立ち上げるとするなら参加者たちとの相互理解を得ながら徐々に実行していくことが重要だと考えられる。

そのための方策として自然体験を段階的に分けて実行するという企画を提案したい。何回かに分けて秩父について学んでいただき、その回数に応じて体験活動の要素を増やすというプログラムを実施していく。この方法によりそれぞれの知識・技術の到達度に応じて抵抗なく体験プログラムに参加してもらうことが可能であり、また目的性を持って何度も地域を訪問することができるようになると考えられる。

例えば、都市部の学校教育での利用の場合、子どもたちに、①都市部と大滝の自然の文

献調査、②大滝地区に赴いてどういった自然環境かを見に行く、③実際に宿泊してどのような生活を行っているか体験するというような3段階のステップを踏むことが考えられる。さらにこれらの3プログラムの体験結果を模造紙等にまとめてもらい、次の参加者の参考にするようなかたちでプログラムを継続できるサイクルが組んでいくことなどが考えられる。こうした段階的にリピーターを誘引するプログラム設定を工夫することがポイントだといえる。自然への認識を深めながら継続的に大滝地区へ人の流れを作るような仕組みが求められている。



大滝地区は、自然豊かな山と川を保有していることから、多種多様な体験が行える可能性があり、求められるレベルや需要に合わせることができないのではないか。段階ごとに多様なプログラムを設定することができれば、都市近郊における代表的な自然体験地域として位置付き、上下流域連携・交流の活性化につながるものになるのではと期待される。

(4) 歴史-隠れた歴史を発信し、他地域からの興味関心を引き出すために-

1) ダムの歴史を活かした交流プログラムの可能性

現在、秩父市には二瀬ダム、浦山ダム、滝沢ダム、合角ダムの4つがある。荒川の源流部に建設され、下流である都心部を守っている。このためダム建設にまつわる興味深いさまざまな歴史があるのだが、単にそれを掘り起こすだけでは、地域活性化の事業には繋がりにくいと考えられる。

しかし近年ダムが新たな形で着目されている。例えば、ダム巡りをしてネット上でそれを紹介する、いわゆるダムマニアの活動がある。ネット上の活動はもちろん、写真集や本

を出すなど活動の場を広げている。最近では、ダム曲を集めた音楽アルバム（CD）が出たり、ダムの日本画を描く女子美術大学生が現れたりなどしている²。

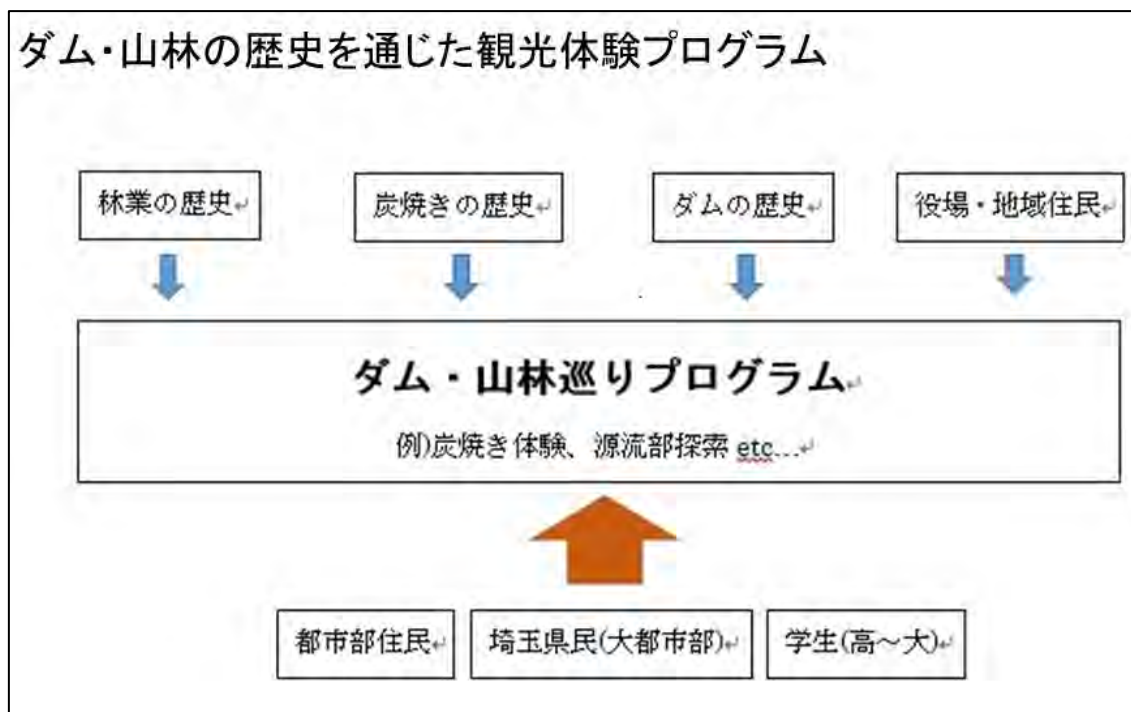
こうした新たなダムの利用方法と合わせながら、ダムの歴史に着目させて、ダムの本来的機能の発信に寄与できるようなプログラムが考えられるのではないかとと思われる。

2) 山林の歴史を利用した交流プログラムの可能性

大滝地区では、主な産業として林業が行われており、伐採した木材は川の流れを利用して東京湾まで運ばれていた。また、江戸時代には伐採などが規制されたが住民のための稼ぎ山として、材木加工などが許されていた。

炭焼きなどを生業としている人も過去にはいたが、その技術を伝えている担い手が少なく、このままでは技術はなくなってしまうことが懸念される。今回、実際に炭焼きをやっていた方に話を聞く事ができなかつたため、詳しい歴史を知ることができなかつたが、このような技術は代々親から受け継がれているということである。今後は新たな形での技術継承・担い手づくりが求められる。

山林資源がほぼ国有林であるということも重なって、単体では生業とすることが難しいため、観光分野と連携した活用方策も検討すべきではないかと考えられる。例えば山林とダムと併用して、都市部の人々に森や山村の中を見て周り、荒川源流がどのような場所か、ダムがどのような役割を持っているのかを知ることのできるプログラムが考えられるのではないだろうか。



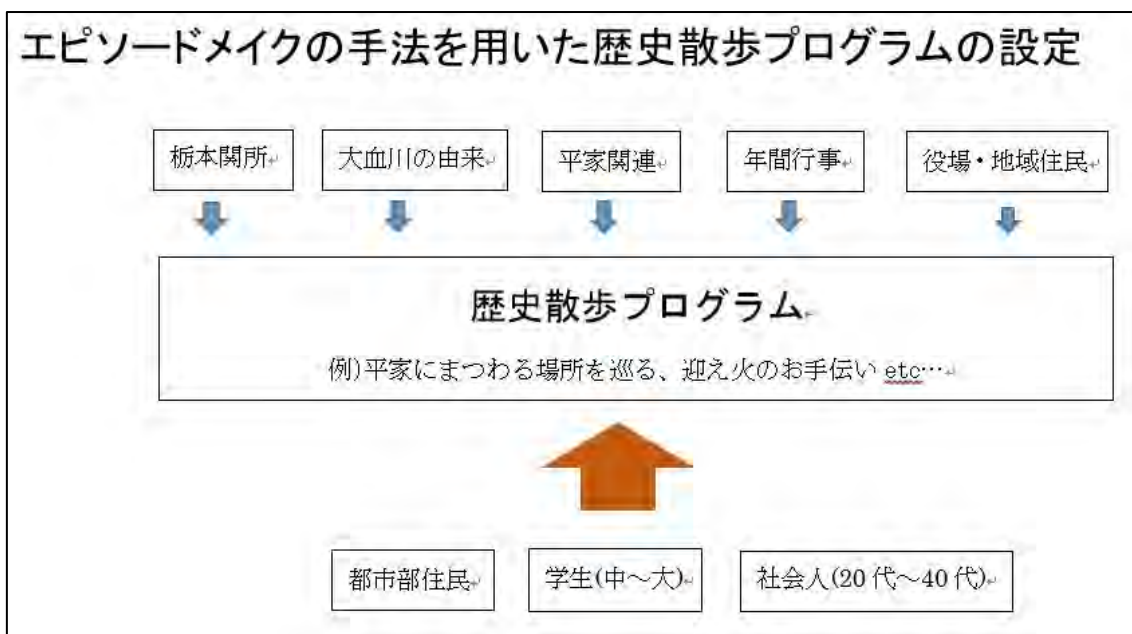
3) 歴史的利用資源の可能性 - 地域伝承などエピソードメイクの手法を取り入れて - その他歴史的資源として栃本関所、大血川の名前の由来などが挙げられる。

² <http://damnet.or.jp/cgi-bin/binranB/Konogoro.cgi?id=293> 2016年12月4日閲覧。

栃本関所は、江戸に向かう際の重要な交通の関所となっていた。かつては、平家も通っていたと言われている。現在は個人の所有ということで、観光名所としては活用されていないようであった。

大血川も、平家にまつわる伝説によりつけられた名前のである。そのため、この2つを融合した歴史散歩のようなプログラムを立てることができる可能性がある。したがって、それぞれ資源単体の歴史だけではなく、その周りや当時の様子を踏まえて、ストーリー化させることが重要課題となるのではないだろうか。この点で、エピソードメイク³の手法の導入も有効であると考えられる。

また、現在は栃本関所から近くの畑に向かってろうそくをつける「迎え火」と呼ばれるイベントを行っている。地元の方の話では、とても明かりが綺麗で今後も続けたいとのことだった。このことから、迎え火の活動を都市部の人たちでお手伝いするプログラムも考えられるだろう。加えて、迎え火以外の行事も外の人が関われるものがないか追加で調査をする必要がある。



5. 総括

(1) 現地調査の所感から

3泊4日という短い期間ではあったが、見たことのない自然や生活環境を自分なりに知ることができた。都内から電車で2時間ほどしか離れていない場所なのに山々に囲まれて水も綺麗な環境が存在しているということに驚いた。大滝地区自体はとても小さな地域だ

³ 地域の歴史を活かして、その地域のブランディングをすること。これらの情報を広く発信することで、研究者や歴史に興味のある人たちを呼び込める可能性も秘めている（専修大学経営学部森本ゼミナール2016）。

ったが、人と人との連携が強くとれており、住民の方々から話を聞くほどこの土地でしか行われていない風習や伝統技術、食文化を知ることができて有意義な4日間になった。他の地域や都市部にはおそらく知られていないものばかりなので、他地域から興味関心を抱いてもらうには十分な力を秘めていると感じた。

(2) 総括と今後の展望

本報告書では、現地調査を踏まえながら、大滝地区の地域資源を「未利用資源」「再利用資源」「利用資源」の3類型に分け、上下流域交流の視点から、それぞれの特徴を活かした活用可能性について検討した。その上で、食文化、自然体験、歴史資源の活用という観点から、上下流域交流プログラムを検討し、いくつかの試案的提案を行った。

全体として見えてくることは、交流プログラム設定のプロセス自体に下流の都市部地域住民がかかわり共に創り上げていくということが大切であるということである。かつて、上流部と下流部は密接な関係があったが、それは一言で言えば人と人とのつながりあいであったといえよう。

今日、都市部と山村のつながりにおいて防災行政といったハード的側面が求められている一方で、山村の人々と都市の人々との人情味豊かな交流も求められている。本報告書で試案として提起した交流プログラムがそうした上下流域交流という新たな「近所付き合いの風景」を創生していくことに寄与することを願っている。

参考文献・資料

専修大学経営学部森本ゼミナール(2016)「大学生、限界集落へ行く『情報システム』による南魚沼市辻又活性化プロジェクト」専修大学出版局

黒沢和義(2011)「山里の記憶1」同時代社

国土交通省関東地方整備局(2016)「荒川水系荒川、入間川、越辺川、小畔側、高麗川及び都幾川について、想定し得る最大規模降雨による洪水浸水想定区域を指定・公表します」記者発表資料

国土交通省河川局河川環境課 2005「上下流域連携促進のための普及啓発支援ツールの検討業務」報告書